

DD NEWSLETTER

83 31 11 (2) (12)

NO. 9

The Center for Southeast Asian Studies

Kyoto University

[9-1] 在村日誌

9/5(月) 宮崎離村、帰国の途につく

9/6(火) 口羽離村、帰国の途につく、林バンコクへ

9/7(水) 福井KKU農学部長ら表敬、河野、北タイへ旅行

9/10(土)、9/11(日) 前川、宮川、福井 Baan Nong Khrai Non の塩性ヘド
に噴出口を調査

9/14(水) Ten Suila 葬儀

9/17(土) 矢野 翠川入村

9/18(日) 武邑バンコクへ

9/19(月) 学生助手、就職試験でバンコクへ、Roi-et の DD 村
民祖先村訪問 (日本人 5 名 + Phô 3 人)

9/20(火) 武邑帰村

9/21(水) 野間長女誕生の電報、Khao Saak 祭

9/22(木) 海田来村

9/23(金) Anukul 来村、打合せ

9/25(日) 前川、野間送別会、於 Tha Phra

25×16

京都府立大学農学部土壌学研究室

9/27(火) 須羽入村

9/28(水) 海田帰盤

9/29(木) 野間帰国の途につく

10/1(土) Phu Vien の Non Nok Tha 発掘跡を見に行く (福井、宮
川、河野、Kanha)

10/4(火) 黒田、松藤入村、海田来村

10/5(水) Xコン委、川合尚代来村

10/6(木) 調査費会計の整理

10/8(土) 黒田、河野、松藤、翠川、須羽の 5 名ウボンへ
2泊3日旅行

10/9(日) 海田帰盤

10/12(水) 武邑離村、帰国の途につく、福井バンコクへ

10/13(木) 文部省海外学術調査担当係長、黒田英雄代来村
(1泊)、福井、同行して帰村

10/15(金) 武邑帰国

25×16

京都府立大学農学部土壌学研究室

〔9-2〕 宗教

「Phii と sum」

D.D村の歴史における宗教の信仰対象を追ってゆくうち、今までのところ次のようなことが明らかになった。

開拓初期当時以来、ついでに33年前までD.D村の人々は phii puutaa という \hat{w} (phii) を祀っていた。これは、村全体（家族、sumのレベルを越える、という意味で）を加護する存在として考えられていた。

一方で、家族を中心にsum単位で phii théwada という \hat{w} (phii) が、家族sumの成員を加護する存在として祀られていた。この phii théwada とは、天国の angel としての théwada とは異なる存在である。村の古語はこの中央語の théwada を tephada と呼び、phii の方の théwada と区別する。この théwada が祖霊と密接に関係があるかどうかは定かではない。というのは、ある人はこの phii と sum の phii = phii sia (\hat{w} 1人) と関係づけて語り、ある人は全く別ものの、単なる \hat{w} ともいうからである。この

25×16

京都府立大学農学部土壌学研究室

phii théwada を祀っていたのは、当時のD.D村に於けるsumのリーダーであった。大抵いば年長者で、彼の家にこれ祀る Han Thewada がおかれていた。約50年前まで、この Han Thewada をまつ人は村でも5~6人であったという。彼らは自らの家族員とsumの成員を守る年長者、司祭者として Moo Thewada と呼ばれていた。毎年、ソングラーン（旧正月）祭には彼の家にsumのメンバーがあつまり、フークケーンとナモン（聖水）をかける儀式をとり行なっていた。

phii puutaa をまつる儀式は、ついでに33年位前まで陰暦の3月と6月に、これをとりしめる châm = 霊媒者 = によって行なわれていた。供物はニワトリ、卵、カメの肉である。最古の老人もこの châm は3人までしか数えられない。彼はとくに村の重要なリーダーではなかったという。単なる祭祀者としての性質が強い。この儀式には村あげて人々が参加した。phii théwada を信仰する者も参加した。

(林)

25×16

京都府立大学農学部土壌学研究室

「祖霊信仰と土地所有」

コンドミナスによると、彼の調査したヴィエンチャン東方の村では、phībānという祖霊神が祀られている。Keyesの調査村であるBān Nōng Toenではphīputaという名で祖霊神が祀られている。D.D.にもphīputaが祀られていたが33年前に村外に移動してしまい、以後は祀られていない。

祖霊神は、最初の開拓者集団の最年長者夫婦である場合がもっとも多いといわれる。村人は、この夫婦を頂点とする系譜集団であると凝制的に考えられている。

D.D.村における系図調査によるとスムと呼ばれる近親集団の成立は、初期開拓者に起源する。現在、親は土地所有権を子供達にばかばか譲らない。完全な相続は、両親共に死去して初めて完了する。スムの中では、さまざま異なる形の相互扶助があるが、その中、土地の貸借売買は重要な形のひとつである。かつては、スムの最年長者が、スム全体の土地処分についてかなりの発言権をもっていた。

25×16

京都府立大学農学部土壌学研究室

たと想像される。

D.D.では、かつて村全体のためのphīpūtaとは別に、有力なスム毎に祖霊(phīthiowada 厳密には祖霊ではないのでは?)と^{まっていた。}コンドミナスの調査村では、村長と祖霊神媒介者chāochāmとが同一人物である。Keyesの調査村では他村からの婚入世帯主は、他の世帯主とほぼ同様の資格、責任、義務をもつが、村長と祖霊神媒介者に代けはられない。

ラオス、北タイ、東北タイでは、かつてmuangと呼ばれる小土候国が多数分立していた。muangにはlāk muangがあり、その領域の守護神として祀られていた。その祭儀をとりおこないうるものは王、貴族に限られ、それゆえにその領域は、王、貴族の領域であった。毎年、lāk muangの祭儀に際して、村のphībānを祀るhō phībān(祠)の模型を、首都のlāk muangの傍において同時に祀った。

(コンドミナスによる)

農地に関する精霊としてMāe Toraniが有名で、ドンでも

25×16

京都府立大学農学部土壌学研究室

祀られているが、これは土地の農業に関する精霊であり、特定の領域とは対応しない。それに對し、phīpūta や lak muang は明確な領域に對応すると言われる。

以上のことを考へ合わせると祖靈神と初期開拓者と土地に對する権限とが密接に関係していることが分る。

ところで、DDで33年前にphīpūta が廃止された際、そのプロモーターは、主に他村から婚入した世帯主で、靈界についての知識に通じた人達であったという。ほぼ同時期に有カスム毎の祖靈崇拜のための祭壇(Hanphrá than) もとりはらわれたという。

Keyes の調査村は、ferrace 上に位置し洪水害がない。分村はなく、村に2つのスムしかない。DD村は氾濫原に水田を持ち、近くにはふたつの分村をもつ。いずれの村の成立時期も120年位前である。

DDは水田が広く、phīpūta につながるない移入者の割合が高かったと思われる。phīpūta を祀る古くからのスムと、

25x16

京都府立大学農学部土壌学研究室

それに凝制的にしかつながらない移入者達との間に、土地をめぐる対立が背景にあり、それがphīpūta の追出しに与った可能性がある。人間の世界のあらゆるものが神々のあらゆるの形をとった例と考えられる。

(福井、林)

[9-3] 村落構造

「集落サイズと親族集団」

核家族を基本とし、双系的親族集団が何らかの必要に応じて互助的に機能するが、その範囲は固定的ではない。というのが「スム」である。「何らかの必要に応じて」というのは色々な場合が考えられるが、重要と思われるものは、移動と大洪水、大旱魃に際しての生存の単位とである。集落の大きさは、これら互助集団より大きい。これは、大集落ほど外敵に對して安全であるためであり、集落内部の組織が日常的に機能する必要は必ずしも

25x16

京都府立大学農学部土壌学研究室

ない。首狩の慣習がある場合、かんがいの必要がある場合、部族戦争がある場合には、集落全体がひとつの生存単位となり、結束が固く、日常的に機能しているように見える。これらと全く欠きかた、民族全体が移動の傾向にある際には、「スム」程度の集団サイズの機能があればよい。

「スム」の構成は双系的であり、かつ、99%に地縁的である。これは移動が地縁的であり、災害が地縁的であることと関連すると思われる。

(福井)

追記

1921年に死者が出るほどの大旱魃があった。牛車で食物をもとめてKhot方向へ放浪した。1923年、1943年に大洪水があり、2ヶ月間村を離れ、避難した。これらの際の小集団の構成、その後の離村、etcを調査すること。

25×16

京都府立大学農学部土壌学研究室

[9-4] 経済

「水田に対する執着と経済発展」

農民は水田に固執する。その理由として次の4点が考えられる。

- (1) 資産形成 (金融市場を利用した資産形成は農民の間では知られていない。)
- (2) 生活保障 (彼等の経験の範囲内では、すべての現金収入源は不安定である。)
- (3) 老後、死後の保障 (老後、死後の面倒を見てくれる者を確保するには水田を相続させねばならない。)
- (4) 飯米自給 (飯米自給ができないうちの現金収入を米購入に充てねばならないから、資本蓄積が困難となる。それは、より有利な現金収入源への道を閉ざす。)

このように水田に固執し、しかも、水田耕作自体からは、現金収入がえられない。このことが、経済的發展にとって非常に具合の悪いことだと思われる。なぜなら、水田

25×16

の重視は、余剰米生産地帯と異なっており、何ら資本形成に直接的に寄与しない。たとえ資本形成が金融市場（有価証券）を通じて行なわれるようになったとしても、事情は同じである。日本の地主層の工業セクターへ投資、イギリスの landed gentleman の工業への投資の場合には、土地への固執と農業→工業への資本の流れが共存していた。ここではそれがない。

もうひとつの具合の悪い点は、労働力の質である。商業生産地帯では、余剰労働力は、主に小作人や土地なし農民層からのものであり、たのび、彼等には帰るべき故郷がない。帰っても都会と同じ雇用労働がまっているだけである。従って、背水の陣で定職をえようとし、生涯設計を都市中心に考える。ところが飯米生産を中心とする自給自足村出身者は、そのレベルの生活に満足していければ、いつでも都市を離れ村に戻ることもできる。「出稼ぎ」という感じがいつでも抜けない。出稼ぎによ

25×16

京都府立大学農学部土壌学研究室

て現金収入をえ、それをもとにより安定した自給自足的生活を村で過す生涯設計をする。これは労働力の質を悪くすることにつながる。

以上、資本形成と労働力の両面において余剰米を生産しない農村の農民の土地執着は、経済発展（工業化）を妨げる。

(福井)

[9-5] 農業

「現金収入機会の増大が水田農耕に及ぼす影響」

近年の現金収入機会の増大は、耕耘機の賃借、雇用労働（水田耕作のための）、ポンプの使用と関係していると思われる。すなわち、機会賃金が高くなったので、他収益の稲作を省力化する働きとして理解することができると。たとえば、耕耘機賃借は、耕耘作業自体の省力化だけでなく、水牛飼養に要する莫大な時間を節約できる

25×16

京都府立大学農学部土壌学研究室

ことを意味する。農業雇用労働の賃金は、農外雇用賃金より安いからその方が得である。あるいは農外賃金をえている者は週末だけで自分の田圃の作業を済ませようとするから、農業賃労働を必要とする。ポンプの使用も、旱魃に対抗する手段としての意味だけでなく、短期間に作業を済ませる効果をもつ。

以上のような新しい現金投入は、従来の稲の生育、収量をほとんど変化させない。ただ、家族労働を機械や雇用労働に置きかえただけである。反収増には結びつかない。

米生産の目的が販売用か飯米用かが農業技術の改良の方向を決定づける例として考えられないか。

「水牛の役割」

かつて水牛は、役畜、現金収入源、ステータスシンボル、貯蓄の意味をもっていたと思われる。しかし、近年では、

25×16

京都府立大学農学部土壌学研究室

とくに定常的現金収入源のある世帯では、水牛は役畜の意味しか持たないようになってきていると思われる。このような素地があるからこそ、耕耘機の賃耕が始まりつつあるのではなからうか。オス牛1頭～2頭のみをもつ農家の数の増加、水田面積と不釣り合いな数の水牛をもつ家の減少などが確認できれば、この考えは成り立つと思われる。

「稲作の不安定性がもたらしたもの」

ひとつの可能性は、一戸当水田面積が洪水のない村の場合より大きいことである。もうひとつの可能性は、稲作外の現金収入をもとめる傾向を強くしたことである。近隣村との比較によって前者は検証される。後者はどうか。近隣村にくらべてたしかにDD村の現金収入の割合は大きいように思える。しかし、その理由は、例えば、たまたま Huay San があつたからだけのもかもしれない。

(福井)

〔9-6〕 自然

「含塩ヘドロのマスフロ」

D.D村北西3 Km, Nong Khrài Nân 村 (ນົງຄຳນັນ) の村の北側の水田に piping 現象に類似のものが見られ、塩害の発生、地形形成、土壌生成とも関係していると思われる。

水田の中に、直径5~10 m ほぼ円形で高さ50~80 cm のマウンドがある。ほぼ接していて、50×100 m の広さ全部にわたっている所を中心として、その周辺100米位の範囲内に10ヶ所以上ある。マウンドとその周辺は塩害のため好塩性の短草がわずかに見られるだけで、裸地と言ったよい。マウンドに足をかけると、マウンド全体が波うつ。強く踏み込むとズブズブと足がまぐり危険である。頂部に少量の水がたまっている場合がある（しみだしている）。検土杖をつきますと、表層10~20 cm 程はやや抵抗があるが、それをつまぬけると、ほぼ杖の重さだけで自然に1 m までまぐりてしまう。竹竿をつきますと、2

25×16

京都府立大学農学部土壌学研究室

~2.5 m まで抵抗なく入るが、それ以上は入らない。

表層には、マール片、鉄-Mnピソリス、チャート、珪化木の破片が散乱している。表層5~7 cm ほぼ砂ばかりで、時に弱い柱状構造を示す。その下層は、わずかに砂を含むヘドロ状のローム(?)質で30 cm 以下にマール結核を少量含むが、層をなしてはいない。

マウンドには硬軟の差がある。硬いものは表層にピソリス類が多く、水が少なく、侵蝕をうけて、やや変形している。軟いものは、ほぼ円形で、水があり、ピソリス類が少くない。

周辺の水田は1 m までほぼ砂で、透水性の悪い層はこの深さまでにならない。しかし、ヘドロ様の物質もない。

地形的には middle terrace が Chi 河の氾濫原に向って舌状に突出した先端部、傾斜変換線に位置する。しかし、マウンドの局所的分布は等高線沿というより、むしろ、それに直角である。（より広域の調査が必要）

村人の話を総合すると次の通り。

以前は普通の水田であった。40年前頃からこの現象（*Nám Dun*）が見られ始め、今日まで増加が続いている。稲刈の頃、突然、田圃の一部が盛り上がる。時に水がふき出す。噴水状態は5～30分続き、その後は静かに流れ出す。盛り上がりは初期に一度だけ見られ、後の変化はない。

この現象は、この村にのみ見られる。遠くの県から見物に来るほどである。

D.D村のThun Boにも類似のものがあるが、これほど顕著ではないという。（未確認）

以上がこれまでに知った事実である。これをどう理解すべきなのか？

（前川、宮川、福井）

このマウンドと関係があると考えられる地形が、幅約50mの帯状に現われている。村からN45°Eの方向、約400mの範囲内にあり、その地表面の傾斜は1°20' (1/43) 程

25×16

京都府立大学農学部土壌学研究室

度である。この帯状の地域にマウンドが一様に分布するのではなく、20～30mの間隔を置いて群になつてゐる。最も村に近い100m程度にはほとんどない。群ごとには軟らかかったり、硬かったり、性質が似てゐる。

この斜面の下には池がある。その池のすぐ脇に軟らかいマウンドが数個あり、20～30mおいて上流側に興味ある地形が20～30mにわたって現われる。特徴づけてゐるのはマウンドと同規模のテーブル状地形で、頂部に10cm程度の砂層を持ち、その下に硬い灰色の支持部がある。支持部の上部は垂直に立ち上つてゐるが、下部は次第に広がっており、隣接するテーブル状地形へと連続してゐる。その広がった部分におびただしいピソリス、チャートが散在してゐる。頂部の砂が矢くれたものもあるが、これは頂部の狭いものだけである。テーブル地形の頂部の高さはほぼ40cm程度と共通しており、両側に残る元の水田面の高さとは一致してゐる。総合的に見て侵食

25×16

作用による地形であることは明らかである。

この部分から20~30m間を置いて軟らかいマウンドが最も多く集合している部分に至る。マウンド側腹に土壤調査用のピットを掘ろうとしたが、40~50cmの深さから下へ掘り下げようとしても、その度に下からヘド口状の土壤が盛り上がり、それ以上深くすることはできない。断面の様子は次の通り

0~2cm : 板状に固結しているがもろい砂の層。水分は少ない。上にピソリスなどを載せる。

2~7cm : 2~3cmのブロック状にこわれる。その表面は水分で光っているが、浸み出してはこない。

~25cm : ブロック状の部分に続くが、こわれ方は垂直の面で分離する。水平方向の面はない。垂直面の方角は様々で、割ると板状になったり柱状になったりする。面に砂が入っていることもある。

25cm~ : 流動するヘド口状部分、縞状に緑や黄色を呈す

25×16

京都府立大学農学部土壌学研究室

る部分を含む。25cmあたりには石灰粒が集積することもある。また非常にもろい赤黄色の砂岩状のものが団塊状に40cmの深さに見出された。

T
pH

約50cmまで掘り下げた穴の底は約20時間後には約35cmになつており、わずかであるが水の析出が見られた。そのpHは9.08(28.1°C)であり最奇のマウンド頂部に穴をあけて浸出させた水のpHは7.75(33.0°C)であった。他方、マウンド頂部から自然に浸出している水のpHは7.99~8.92、平均8.65また、マウンド裾のたまり水は9.35~9.51で、近傍の田の水はpH8.78であった。

〇この村までには2~3ヶ所マウンドの群が見られるが、群間の距離もマウンド間の距離もまばらになる。

〇村の最も北側に広場がある。その深さ約50cmの深さ

25×16

京都府立大学農学部土壌学研究室

に検土杖も入らない固い層がある。軟らかいマウンドが最も多く集まっている所はほぼ平坦でわずかに傾斜しかないが、そのマウンド頂部から底の硬い層までは214~248cmであった。これに対し、そこから約25m上流側のマウンド頂部から底の硬い層までは336~358cmであった。この間の地表面の高底差は約50cm~80cmである。

○これら水を滲出している活性的マウンド群のやや西約20mに、塩取り後の残土を積み上げたマウンドがある。

○前述の、斜面の最下部、池に最奇りの軟かいマウンドは、極めて多くの黒色ピソリスに覆われながら、且つ頂上からの水の滲出がみられる。斜面上部の活性的マウンドとは景観を異にする。

○村人の話によると、最古マウンド形式は村の近くで始まり、次第に斜を下るような順序で吹き出しが起きたようである。

○ピットの30~40cm深から採取した土壌の酸度は9.5~9.6

であった。

(前川、宮川、福井)

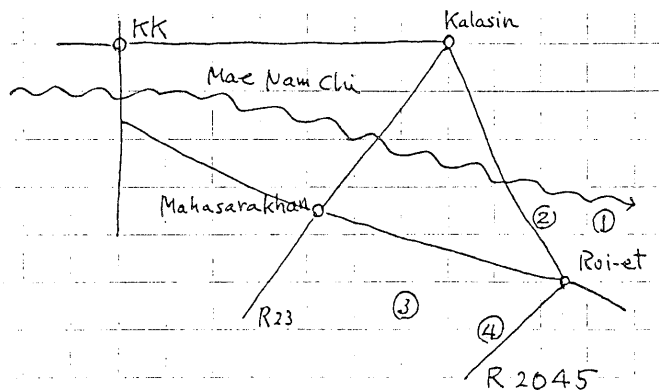
9月18日、ヘドは下層の調査によると、同層は砂質で赤色、白色の塊状構造をもつ。塊状とは、指先にやっとな潰れる程度の硬さ(φ0.3~3cm)で、結核は含まれない。鉄がセグレゲートしていると思われる。斜面最下部のマウンドでは、ヘドはより流動的に、その厚さは1m強しかない。下層は上述と同様である。

〔9-7〕他村比較

DD村祖先村訪問

I. 各村の位置

- ① Ban Mamon
- ② Ban Daeng
- ③ Ban Kok Khâa
- ④ Ban Khon Kaen



II. 各村での調査結果

1 Ban Mumon Tambon Mumon(?)
Ampoe Thwatburi

1.1 概要

人口	♀	♂	Total
Muu thii 1	474	442	916 (人)
Muu thii 2	383	313	696

面積 水田 rai suan 公共地(主に墓地)

Muu thii 1 1636 0 49 65

Muu thii 2 1328 0 96 8

(注. Ban Mumon は Muu thii 1 と Muu thii 2 とに分れている。20年前から)

1.2 歴史

ビエンチャンから400年前にやって来た。

1.3 稲作

昔はほとんど洪水ばかりだった。

25x16

京都府立大学農学部土壌学研究室

今から42~3年前頃(2484~85)は米倉はいっぱいだった。米は売らずに買わず。その当時の米価は50タイ/10-15タン。

30年前から洪水のきかたが変った。(ゆりくり→はやく)

竹の米倉 hin kèp khào は30年前に rao kao に変った。米の貯蔵量の増加による。竹の米倉は25~6年前まであった。

この5年間の米の作柄

2521 洪水

2522 収穫良し

2523 "

2524 ちよとした旱魃

(K.Kの精米業者<華僑>が米を買い付けに来る)

2525 旱魃でダメ

2526 イサン史上初の大豊作

最近では Roiet で飯米を買う。

現在、Kao Niao 80%, Kao Chao 20% 品種は K.Niao は Saipaton,

25x16

京都府立大学農学部土壌学研究室

RD.6, RD.8, K.Chao は RD.15, Hommalli。昔は品種数も、と多
か、た。

店で売っている肥料は 22-11-11 で、田に入れる。

1.4 rai, suan 及び畜産

養鶏が盛んである。カヤぶきのにわとり小屋がある。

suan の作物は、バナナとマンゴーが主である。

1.5 宗教

Muu thi 1 には 2 つの寺がある。Wat klaay, Wat lao がそれである。Wat lao は 2361 年に創立。

Muu thi 2 にも寺が 1 つある。レカレ歴史は Wat lao よりさらに古いと言われている。

この村が Han phra tham をもちだしたのは、約 4 ~ 5 年前のことである。informant 自身、4 年前にも、っている。それまでは phyi pun taa が主流であった。

1.6 その他

集落は道路にそって列村状に立地する。

25x16

京都府立大学農学部土壌学研究室

樹木が多く、道路から集落内の見通しは全くきかない。
カムタン (= 村長) の家の近くの井戸の水位は -1.75m であ
った。塩があるので人は飲まない。

1.7 informant

Phrom chatutaen

カムタン、48才 村長として 10 年目

2. Ban Daeng

2.1 概要

戸数 170 戸

農村開発委員はやってこない

2.2 集落の様子

垣根をもった家屋が、主要村内道を挟んで両側にの
り規則的に立地する。各家は竹の戸をもつものが多く、
村の入口、出口には門がある。このようなタイプの集落
がこのあたりに多い。

かなりの傾斜地に建つ家もある。

25x16

京都府立大学農学部土壌学研究室

2.3 歴史

80才の老婆によるこの村の歴史は、回顧的に約400年位である。

2.4 インフラ

学校は村内の手にもあるが、隣村の Ban Sawan との間に、両村共有の学校がある。これは5年位前にできた。

電気は3~4年前

電動のライスマルがある。

2.5 Transportation

ソンテオはイスズエルフサイズの1台で、8年前からある。Poietまで1日3往復(片道3バーツ)

バイクは村内に7台

2.6 稲作

水田のみで、畑や suan はほとんど見られない。

この村にはほとんど洪水はないが、一回、大洪水があり(時代不詳)、その時に良い田を求めて、離村した人

25x16

京都府立大学農学部土壌学研究室

があったという。

40年前まで、竹カゴ式のラオカオであった。

米は余るため、他村から買いにくることがある。

非常に flat な水田群がある。大きさは M. Doen ぐらいで、周囲はやはり木で囲まれてはいるが、北高はほとんどない。

Poiet市の面から約2m低い面はこの村があり、更に1~2m降りた面はこの村の田がある。8月に深水状態になったらしい。

水田土壌は1mまで灰色 silty. 70cmから赤、黄斑が見られる。ボーラーの工手には黒ピソリスが出ている。田中に poon もあるが少ない。Poietの面には多い。水田には雑草が見られない。

Kao Na pii がある。うるち品種を作る。

二期作ははいと言う人もある。

K. Niao の品種は Sanpatong, Sao Sanpatong が主である。

25x16

京都府立大学農学部土壌学研究室

2.7 rai, suan 及び畜産

村内で牛(?)の乾肉を作っている。肉に飯粒がついている理由は不明

2.8 農外収入

D.Dのような婦人のマーケティング活動はみられないし、村内の経済化も、D.Dより遅れている印象を受ける。17には Roiet での雇用機会が少ないことによると思われる。

バンコクへ出稼ぎに行っている者も村人には多い。Roiet 市内には300バツ/月ぐらいの収入しかはない仕事しかないのので、彼らはバンコクへ出て、サムローの運転手、construction worker (日雇い、土方) で月300~500バツぐらいの額を送金してくる。乾期には小型トラックを雇って、バンコクへ行く。

サウジアラビアへの出稼ぎ者はゼロ。パスポート代が念出できないためという。(金があれば行きたいとのこ

25×16

京都府立大学農学部土壌学研究室

と。) 水田をそのために売ることには皆したくない。

2.9 宗教

Phii puu taa の信仰は今も、盛んである。水田内には Phii puu taa をまつる大きさ(1DNの約5倍位の大きさ)の祠があった。

この村にはD.D村にあるような lack Ban はない。

しかし、Phra tham (phra tham) 信仰は、ここ30年位になつて盛んになつてきていると80才の女性はいう。

彼女自身は(昔、D.Dにも約50年位前まで存在していた)未だに phii thiowada を信じている。だから自宅にも仏間もついている。しかし、以前のように、この phii thiowada を司る Moo thiowada がいたいの(同村に)、隣接村である Noon Sawang に2人いるうちの1人を自宅に呼んで、儀式を行なってもらう。

50年前には、同村には10人位の Moo Thiowada がいた。phii thiowada 信仰が主流だったという。

25×16

京都府立大学農学部土壌学研究室

phii sum = 母方を重視する sum の phii 信仰は未だに強い。

3. Ban kook khâa Tamboon siisomdet, Amphoe muang (?)

3.1 概要

戸数 73 戸

3.2 集落の様子

この村は Roiet からの道の終着点に位置する。この道はかなりの悪路である。途中の景観は、かなりの高度差をもった波状構造のテラスであり、頂上部ではケナフを栽培する。

集落は丘の頂部にあり、その下に水田が広がる。また、かかも Don Kien Sai に集落があるようなものである。

3.3 歴史

この村の歴史は 100 - 110 年といわれる。

この村の多くの人々は Ban kuan kao より移住してきている。土地が悪く、良いところを求めたここに来たと言われている。

25x16

京都府立大学農学部土壌学研究室

る。

3.4 インフラ

村の小学校は 5 年前に完成。それまで Wat siichan で教師 5 人が児童の教育にあたり、いた。

電気は既に来ている。

3.5 Transportation

Roiet までソロンテオが 1 日 2 回走っている。(7:00 A.M., 12:00 M.)、片道 7 バーツ (Roiet から約 38 km)

3.6 稲作

洪水はめったにない。旱魃に悩まされる。

10 年前くらいから雨がよく降った、生産が安定してきた。それ以前は雨があまり降らなかった。

最近の収穫は

2521 多雨で豊作、洪水なし (-例、300 tang/rai)

2523 6 月に旱魃

2524 旱魃 (-例、50 tang/rai)

2525 " , 田植率 30%

水田群のまん中に小川がある。巾約5m。水は流れていない。所々にたまり水がある。魚とりの罾がしかけてある。

高位部の水田は乾燥がひどく、低位部で水深5~10cm。D.D周辺の水田より全般的に水が少ない。水田の区画は長方形ではない。等高線の曲線に沿ってケイ畔が設けられている。

Kao Niao がほとんどである。

Kao Do はあるが少ない。RD6 および Kao Khao, Spanpatong が主である。Kao chao も少しある。Kao chao Deang である。

オカボはない。

3.7 rai, suan 及び畜産

約10年前からタバコを植えている。タバコ畑は集落域内にある。売り先はBan phaiのタバコ工場(アメリカ資本)村全体で、牛56(頭)、水牛182、豚10、馬7頭。

25×16

京都府立大学農学部土壌学研究室

3.8 宗教

東北タイに顕著な phi pun Tao 信仰はこの村では40~50年前にたくなり、村人全員が仏教徒を自認している。村の中心祭祠ラックバーン lak Ban はできて50年になるという。

彼らは親類を Ban Sawang (T. Don Han, A. Muang, ch. Khon Kaen) にもっており、そこへ訪ねていった際、Ban Sawang のモータルに教えをうけている。

3.9 informant

村長、56才、18年の長きにわたり村長の地位にある。

彼自身の父は、Ban Sii Keek, Mahasarakham 出身。

4. Ban Khon Kaen (Mun thi 2)

T. Khon Kaen, A: Muang

4.1 概要

現在、T. Khon Kaen 内には15の村がある。この Khon Kaen 村には、その中の②、③、⑤村 (Mun thi 2, Mun thi 3, Mun thi 5)

25×16

京都府立大学農学部土壌学研究室

が含まれる。Muu Thi 15 は昨年加わったところである。

② = 134 戸, ③ = 115 戸, ⑤ = 67 戸

② が最も歴史が古いといわれている。

4.2 集落の様子

広い土道 (R2045) から 300m ぐらい外れた所に位置する。

水田との高低差は非常に小さい。

ブロックとレンガで建設中の家や、同村で平屋にした家がある。

4.3 歴史

村長自身の父の父の代に、Mahasarakham より移住してきた。

村史は 400 年以上である。

4.4 インフラ

電気は 2519 年に通った。

村は比較的豊かに見える。冷蔵庫、T.V. はともに 50 軒が所有する。扇風機も半数の家にある。

井戸に水中電動ポンプが設置されている。(水面の深さ 3m)。

23×16

京都府立大学農学部土壌学研究室

4.5 稲作

洪水の経験はない。日照りに悩まされる。20 年前に大旱魃があった。しかし米はもったという。昨年の旱魃では、収量 50%。Roiet へ 100 バー / 1927 円で米を買いに行っていた。

米は単作である。90% が Kao Niao, 品種は、RD6, Sanpatong, Kao Chao の品種は Dok Malli が多い。

4.6 rai, suan 及び畜産

草地が村内に少ないため、集落内のわきの草地に水牛をついで草を食べさせている。

鶏舎がある。

桑の木が多い。

4.7 農外収入

子弟には、役人や教師が多い。警察官もいる。

乾期の間、Roiet で construction worker として働きに出る。

また、Khou kaen, Kalasin へ行く者もあるがもうけは少ない。

23×16

京都府立大学農学部土壌学研究室

Bangkok へも出ていゝが、ほとんどサムロークシーの
運転手である。

サウジアラビアへの出稼ぎ者は少ない。Khon Kaew 村三村
合わせて現在5名。今年から村長はサウジへの出稼ぎを
禁じている。向こうの仕事が少なくなってきたという、
県当局の information に従っているとのこと。

4.8 泉教

仏柵をもちはじめたのは、約20年位前。

4.9 informant

村長、53才、20年来村長の地位にある。

(宮川、前川、野間、林、河野)

[9-8] 歴史

1「コーラート高原のラーオ人は民族移動の途上にある？」

DD村の成人男子のほとんどは、かつて土地を求めて
旅行した経験をもつ。現在、結局、DD村に残っているの

25×16

京都府立大学農学部土壌学研究室

は、親の希望、妻の希望、他所により土地が見つかりな
かったからという理由による。

彼等は、DD村の人間関係には愛着をもつが、土地に対
してはそうではないらしい。むしろ、土地条件としては
よくない、ここは安住の地ではないと考えているらしい。

だとすると、ラーオ人のコーラート高原進出以来の拡
散は、必ずしも人口増加によるものではなく、むしろ、
広い意味でのタイ族南下(クレドナー流の)現象と見た
方がよいのではないか。

狭い意味でのタイ族は、スコタイ→アユタヤ→バンコ
クとその核心地域を南下させた。ラーオ族の場合は、ル
アンポラパン→ビエンチアン→チャムパサックと南下し
たところで、クメールとグエトナム族に南下を阻まれ、
西に転じたが、その土地条件が悪いため、核心域形成に
至らぬまま中部タイでタイ族と混合しつつあると考えて
はどうか。

25×16

京都府立大学農学部土壌学研究室

従って、東北タイ人の中部タイへの進出は、単に農村→都市への人口移動の問題ではない。中央タイ、北タイの農村部への進出をも含む大規模民族移動である。東北タイの地域開発と、東北タイの経済的福祉とは分けて考えられねばならない。東北地域という枠にとらわれず、この民族移動中の人達をどこに受け入れるべきかという発想が必要である。

(武邑、林、福井)

2. 「畑地開拓」

DDの畑地は二類型に分けられる。第一のグループは、各人の水田域の高みを畑として開墾したもので、いわば水田附属型。第二のグループは村の南部の middle terrace の丘陵頂部に展開する。後者は100ばかりの小地片に分割所有されている。後者について、畑地開拓史は明確に四期に分けられる。

25×16

京都府立大学農学部土壌学研究室

I. クワ時代

スアンバーン (Suan ban) と呼ばれる集落近傍の畑の主作物は、かなり最近まで、クワであった。クワ栽培と養蚕は今も細々と続けられている。

II. ワタ時代 (1941~47,8年頃)

日本軍の進駐と機を一にして市場から綿製品が消え、価格は水牛一頭200~300バーツに下り、パーカオマー一着分が7~11バーツにも高騰した。同時に、DDにもワタ栽培が始まった。各人それぞれで森を伐り、半ば焼畑的に自家消費用としてのワタ栽培を始めたが、終戦をむかえるころには次第に定着畑化し、各人のナワバリはほぼ定められたらしい。しかし、それら地片のごく一部分がつかわれた程度で、畑地はまだ「無価値」であった。2~3ライの地片とナワ1本が交換された時代であった。

III. ケナフ時代 (1948年頃~1960年代末頃)

定着畑作としてのケナフ栽培が導入されて畑地に価値

25×16

京都府立大学農学部土壌学研究室

が生じてくると、村人は競ってBT6(ボート・ホップ、村長が認定した面積に応じて支払う土地税)を納め、それによって、少なくとも仲間内では各地片に対する耕作権を認知し合うようになった。ただし、ケナフはレットイングのために乾季の水場と多大の労働を要するため、畑地の全面が耕作されたわけではない。

Ⅳ、キャッサバ時代(1966以降)

1966年にキャッサバが導入されると、ケナフは、この省力的栽培が可能作物によって瞬間に置き換えられていった。そして、畑地の全面にキャッサバが栽培され、今日に至っている。畑地にNS3(1-ソ-サーム、土地占有権証書)が交付されたのは、ここ5年ぐらいのことである。

畑地においても、「大土地所有」は見られない。ワタ時代、ないしケナフ時代初期の土地割りが大幅に変更されることなく、各地片は「複雑に相続されて」今に至る。

25×16

京都府立大学農学部土壌学研究室

といえる。畑地の売買は、一見頻繁なように見受けられるが、多くは「スム」内部での移動である。

畑地の占拠を巡るconflictのはなしは、今のところ、全く聞かされていない。ワタという自家消費作物によって畑作が始まり、仲間内での土地割りが徐々に定められていったことによるのであろう。

(海田)

3 「溜池の築造」

Nong Kae, Nong Da, Nong Oの3つの溜池の築造の経緯を調べてみると、いずれも主目的は家畜のために乾季の水を確保し、池敷を放牧地としたことである。予想どおり(?)、池水を灌漑に使うことは期待されていないし、又築堤によって下流側に新しい水田が造成されたという事実もない。

東北タイには大小の池沼(nong)が無数にあり、それらの

25×16

京都府立大学農学部土壌学研究室

多くは多少とも人工が加えられ、溜池化されている。池敷及び河川敷は全て共有地或いは入会地(Saathaarana)である。

戦後、東北タイにはアメリカの援助で200の灌漑用溜池が築造され、これからは、近い将来にその数を2000にしようとの計画が進行中である。灌漑用溜池築造は、東北タイの風土の中では、理論的に成立し難いし、歴史的事実としてもまた、的はずれの努力ではないうか？

(海田)